

タンクメイト

hirokiyamamoto

父親は姿を変えた自分の親しい息子を持ち上げて、げにもおろかにも、祈りを捧げながら殺してしまう。彼らは哀願するものを犠牲に供することに心を乱すが、しかし彼には叫び声は耳に入らず、殺戮したうえで、館のうちに凶しき食事をととのえる。同じようにまた、息子は父親を、子らは母親をとらえては、その生命を奪って、親しい身内の者の肉を食らうのだ。

——昔の偉いひと

カズナはわたしの死んでからひさしぶりにハルと出会うのだったから、電車は遅れてしまうのを見越して駅まで行かなくちゃいけないけれど、電車は遅れるでなしに来ないのがいつものことで、点検や人身事故じゃないと知らないひとなんてどこにもいないのだった。

その日もカズナは払いもどしをお願いすると、人々はのんびり電車を待っていて、このままじゃ遅れてしまうかもしれないとメールをしても返事が結局なかった。近いから仕方なく歩いていくことにして、彼は地下鉄の曲がり角でとつぜん子どもが滑りこんできたかと思ったら泣いた。母親は慌てて抱きかかえ、なだめるのをじっと横で見ている。

線路はどうなっているんだろうと思ったけれど、線路は高く、高架橋をずっとどこまでも伸びているし、下がったと思えばすぐに地下へ潜ってしまう。彼はときどき籠った通過音が聞こえてくるから、もうすでに復旧は終わっていた。エビに食べられるくらいなら運転手を代理にすればすむ話だし、なにより困っているひとがいてはだめだからみんな急いで連絡を密にする。彼は待ちあわせに遅れてしまうことを雨が理由にして謝っていた。ハルは人身事故を知らない。ありふれてしまっているからだろうけれど、エスカレーターを走れば前のひとがすりとよけてくれる。

「最近夢のなかでひとが死にすぎるんだよね、知恵熱的にあつくてもう……」

喫茶店はシナモンのたくさん振ったモンブランがおいしいと聞いて彼は選んだ。外観が古い屋敷のようになっているから大きな観葉植物をおいたり、止まった焦げ茶色の置時計があったり、店内は横長に広くて彼は店の奥へと連れられていった。ハルは変わらず辛いものが好きだけれど、モンブランだけはとりわけ甘くても好きだと言っている。彼はコーヒーとパスタを注文し、ハルはショートケーキを食べながら店の名前の書かれたナプキンを数えていた。久しぶりに会うとハルは冷凍保存された魚のような目で彼を思い出して笑っている。

「死んだあとなのよ、みんな、縮れた報告みたいにさ。もう一度見せるから塗いかえなくちゃだめだって、怒られる。あの子は死んでから、なにかずれちゃった気がするの、もっと本来は選ぶべき表面が裏返しに折られて」

もともとの過程でないところで生きてる？

「うん、いや、もっと楽に、それこそ一度終わらせて生きたい。そうすれば今よりずっと平穏に懐かしむものが増えると思うし、もう二度と照らしあわせることのできないものが一番こわいでしょう？ 家電的な嘘がつきたいの、わたしは」

このまえシャワーをしながら、うんまあねって声に出して言っていたのだけれど、その前後に考えていたことといえば飛行機に乗るってことくらいだし、なにか同意の気分になってた、そういうものなのかな、ぜんぶ。

「思い上がりとは人間が生まれつき持っている病気のようなものだ！ ってね。わたし、ちかごろ毎日子どもだったときの音楽や映画を流すの、それがいいと思って、それくらいしかないな」

カウンターでは平日の昼間から中年の男と女が自分たちの先行きについて話をしている。男はスーツ姿で、窓の外の子の走るかたちを眺めながら、女はぴくりとも笑っていない。男はコーヒーの運ばれて最初の一口以外は一度も口をつけずに外へ出た。携帯電話の画面を見ると派遣された各国の援助の撤退を求める声や、地方の生肉加工業者が爆破されてたくさんのひとたちはバラバラにちぎれてしまい、ぽっかりと空いた黒焦げの屋根や壁からめったに起きることのない大きな事故だと言っている。携帯電話をポケットにしまって、それはとても激しいことだとわたしは思う。ときどき罰として思い出す事柄が、いつまで残るのか、死ぬまで、それこそ生きられたとしてあと六十年も残っていたりするのなら、ずっと変わらない思いとしてなにかしら名づける。

*

わたしのはじめての妊娠は、四角いガラスケースを抜け出したあの悲惨な戦争時代の終わりだった。今ではみんな残さず忘れてしまった透明な時間の終わりがある。水槽の上部にとりつけられた濾過装置のふるえる低音な発声に嫌気のさした一匹のミナミヌマエビは、ぐるぐると客観的な美しさでレイアウトされた流木の上に飛びかって叫び、もう二度と聞いていられないことを確信した。それは生涯拭い去れないほどの根深い抗体反応で、そのときわたしは十七歳の、ひとり暮らしをはじめた一年半くらい前、炭酸水に浸るような夏の夜の密室だった。

ガラスの水槽からうまく抜け出していく方法は、毎日朝ごはんをしっかりと残さず食べるよりもずっと簡単で、ずっと明解で、ずっと自動的な方法だったと彼は言う。散らつく電灯の消え、豆電球の白く飛んだような赤色の光だけが水槽の一面にうつるなか、

ぶくぶくと泡立つ循環装置の流れに波紋をひろげる水面へむかって、たくさんの、見分けのつかないいくつもの足をばたつかせて流木の先端から飛び出し、泳ぎ、あとは身をまかせてふわりと浮きあがっていくだけだとわたしは聞く。恥ずかしくなかったの、どうなの？

ぼくはみんながじっと見てるのだったから、それはたしかにそうなんだろうと思う。だってやり方も世界も知ってるのに今まで誰もやってこなかったぐらいなんだし、もちろん他のところではたまに何度かあったみたいだけれど、でもあれからみんなどうしてるのか、ぜんぜん伝わらないくらいにおそろしいからわからない。むしゃむしゃと駅前ハンバーガーをむさぼり食べながら、まるでおおよけには知られていない不衛生でバラバラな噂をこっそり教えてあげるように、神妙な顔つきで、ときどき笑いながら、そんなふうなことを制服姿のわたしにだけ話してくれたことがあった。夜の店内はにぎやかな客の入れ替わりが絶えずめまぐるしい速度で行われていて、わたしと彼はそんななかの片隅の机だった。どちらを見ても囲んでいるみんなの話し声よりもなによりも、店員のひとの決まった掛け声が一層はっきり聞こえてしまうわたしは、それでもはっきりと彼は話していることを思い出せる。

でもほら死んじゃわないの？ 慣れてはないの？ ときくと、痛くも痒くもないよ、強いていうならちよっと歩きにくいだけ。どうしてそんなことが言えるんだろう？ わたしの分もべろりと食べてしまっという彼は、最後まで変わらない食欲がみんなを区別なく不幸せにするのだったから、制服を着た少女がイヤホンを耳にしながら帰りの時間を待っていた夜の一時も過ぎたころ、訪れる客の数も種類も減ってきて、誰も座っていない席のまばらに少しずつ増えていき、ときどき思い出したように顔をあげてはまわりを見つめる以外にうつむいて話さないまま、しばらくすると店を出て帰った。次の日もその次の日もそこにいて、誰かは待ってはいないけれどそこにいて、アイスコーヒーのSサイズひとつだけを頼み、お母さんとした喧嘩というほどでもない意思疎通の不具合がゆるやかに人通りのあいだをすり抜けていったとしたら帰る。

でもそこまで退屈じゃないよ、じっとそのままでいて、変わらずまばたきをしているよりずっと変わっていくようだったから、ひたすら時計を確認し、今帰ったとしたら夜の街灯を歩いてベッドで眠った次の日の朝に学校へ行っているわたしは、彼の話のあれこれを聞きながら何度も耳にした音楽を同時に口ずさみ、きっとそれなりの危うさは逃れようもなくそこに挟まっていたんだと思ってひどく悲しい。気づけばずっと水のなかでいて、それも年中、温度調整をきっちり行われていた添加物まみれの液体を吸いながら、わたしのつけたり消したりする電灯によってあやふやに刻まれる偽物の、繰り返された昼や夜を過ごしてきた彼が、そんなに簡単な脱走を覚悟できるわけないし、もっと痛みや悲しみを背負うべきなのだと思うし、でも本当に知らないような気もしていたから溶けこむ温度に違いがあるのかもしれない。

あのころはちょうど夏だった、真夏の、ぼちゃんと音をたてて水面から呼吸へ飛び出したミナミヌマエビが聞いたのは濾過装置の絶えない発声ではなくて、まったく新しい、つんと冷えすぎた空気の鈍った流れだった。わたしは暑すぎる外にぐったりし、エアコンをひたすら強くつけながら薄いタオルケットをしっかりと頑丈にかぶり眠る生活だった。タイマーの自動的な正しきで切れる三十分前のその音を、ミナミヌマエビはなによりも最初に聞いた。

びっしりと濡れた身体を持て余しながら、慣れない手つきでふらふらとあたりを見まわすと、うっすら見え隠れする机やカレンダーや曇った鏡の輪郭と、それから寝ぼけたわたしを見つけた。そのとき池に沈みこむような終わりのない夢を見ていて、それが光の届かないゴムのように伸びきった気だるい暗闇だったわたしは、泥や苔のたまった底のぬかるみがふわりと舞いあがり喉につまるのをひたすら触れていて、音のない着地だと思ったら視界もなかった。どこまで広いのかわからないそこは今では埋め立てられてしまった街外れの池の、育てられなくなった魚や亀がよく捨てられる場所であることが最初から知らされて、わたしは息を吸うとぜんぜん困らず吸えるのだった。区別のない雑多な魚や動物の死骸や糞や脱皮の殻のつもりにつもった淀みの水を吸うなかで、咳きこむはずのところが急かされる反応はひとつもなかった。びたりと風景は押し黙っていて、そこが夢だと教えられてはいるのだけれど、夢はそれまでのつながりを断ち切ってしまう、夢を見ていたわたしを見るときになればもう夢は代わって映像になっている、掠れ焼けきれた映像が、それもやっぱり忘れることが多くて、くっきり決られたように残っている覚えはたぶん生活のひとつに必要な記憶や習慣となってしまうている。だからわたしは何度も話して聞かせたことをわかる。

「夢の池の底にいて見えないことを言い聞かせていたのに、うつぶせのかたちでのんびりきみの方を見てたの、最初もしかしたら泳がなくちゃいけないのかと思った、でもそんなことはなくて、ただじっと横になってるだけでよかった、すぐに工事ははじまって黄色い工業機械は土や砂を運んでくるし、セメントで固められて、大きな建物が建つからそこにみんなは住むの、朽ちるまでの短い周期を住むの」

彼は当てはめられたように影で、わたしを見ていた。ぼんやりと横たわる像が、動くまで生きていると彼は思えなかった。まるで毛布や枕と変わらない、それまで眠っている熱帯魚や仲間のエビたちは眠っていてもそれなりにまぶたを開けて流れていたから思えない。しばらく枕に左頬をくっつけながら、薄目で見ていて、ふいに身体のなかの浸透を入れかえるようにゆっくりと深く息をした。その小さな動きで気づき話しかけようとしたけれど、内臓につまった水はとれなくて、逆流し、手足をばたつかせながら噎せて水を一リットルも吐いてからようやく声は出た。幼さの残る声だった。

ねえ、外はどこの方角？ わたしはずっと黙っていた。上？ 上に行けばいいの？ もう上だからこれ以上はいけないかもしれない。じゃあ下だね、と彼は言った。慌ててわたしはとめた。お母さんが眠っているし、もうちよっと待って。今何時？ もうちよっと寝るから待っててね。次に起きたときは朝の目覚まし時計がギシギシ鳴っているのだろう。いつもの朝と変わらない。

すべてが道なりに産まれたにおいをつなぐなか、そんな勘違いをしながら朝ごはんを食べようと食パンをトースターへ入れてバターを塗ろうとしたときにふと、喉の底でぬめった泥の重みがして、夜のあの影のミナミヌマエビの声を思い出し、リビングのはしっこの変わずニュースをやっているテレビの横で、背骨を丸め、ぐにやりとした格好でうずくまっているのだった。なんだかすごく、わたしは悪いことをしてしまった。

ねえ、お母さん。

「なに？」

お母さんは早口にごはんを食べていて、邪魔をするのはとてもいけないことだとわかっている。わたしがさ、と言うと全身の聞く耳が落ちてしまい、見ると彼はじっと待っているのだった。

「なに？」

もしかしてエビはきらい？ わたしはきくと

「あのエビのこと？」

お母さんは言ってわたしは全部を取り戻したような気がした。そう！

「いいんじゃない、あなたの好きにすれば」

ゴボゴボゴボ、ゴボゴボゴボという大きな破裂音がして、見れば元気に笑っているのだった。すごくバカにしたような笑い声がぼたぼたと涎のようにたれていて、床は一面すぐにびしょ濡れになってしまい、ちょっと汚いんじゃないかな……と思ったわたしは掃除をはじめている。彼はいつもうれしい。

もちろんもともと熱帯魚の水槽をきれいに掃除してくれると聞いて飼っていたものだったから、特別にエサをあげたこともなかったし、疲れて帰ってきてぼんやり水槽をながめている時も、きらきら光るネオンテトラやグラミーのびっしり覆われた鱗の反射くらいしかわたしは目についていなかった。ときどき卵を抱えて砂利の上を歩く一匹を見たその時だけはすこし興奮する。興奮してしばらく待つと水草のしげみや流木の影に、パンくずのような小エビがたくさん群がっているのが発見し、わたしはあまりにたくさんいすぎて成長の過程なんて一度も見ることがない。それにいっせいに何十匹も生まれていながら、全体の数はといえば減る一方で、すぐに探してもいなくなってしまうから、決まった間隔にわたしは学校帰りの途中の駅で降りて、ちょっと歩き、たぶん最近改装されたと思うホームセンターの奥のきれいなペットショップコーナーで二十匹ずつ買った。十匹でたしか六〇〇円くらいだったから、一二〇〇円か一三〇〇円の値段のする彼らは、ビニール袋に空気詰めされたまま抱えて電車で帰ると、ビニール袋に詰めたまま水面に浮かべ、水温調整をしてからやさしく流される。水槽の上からゆっくりと落ちていくエビたちの前後左右に振れるじたばたな抵抗を、熱帯魚たちがエサかと思いながらのんびり観察している。

彼らが今まで自分たちの知らないところへ来てしまったことに驚き慌てようとしながら、わたしは「エビを食べるとエビにのつとられちゃうんだよ」という言葉をぼんやりと思い出していた。それがお父さんの小さいころよく言っていた言葉だったと今では覚えているのだけれど、そうやってなにを食べさせたくなかったんだろう、エビを？ それとも魚を？ ふつうにお父さんは平気でエビを好きだったから冗談なのかもしれない。本気だったのかもしれない。わたしはよく覚えてしまっている、茹でて赤くなったエビも、焼いて赤くなったエビも、揚げて衣のついたエビも、みんなバラバラになったエビたちは洗濯機の底に残った石鹸かすのように蓄積されていって、それは取れず、わたしの奥でかたまり強まるにおいと一匹が静かな居心地を悪くする。

そんなふうなことを計算と言うのかもしれない。綿密に測って印をつけていく作業の正確さはずっと苦手だった。小学校のクラスの中のわたしがふいにあたりを見まわすと、みんな同じ顔をしているわたしがそこにはあって、焦ったわたしが定規を目にあてると、きっと微かな誤差でしかないのだろうけれど、誰もがおなじ目の大きさをしていることがわたしはずっと覚えていたし、それから大学生のわたしは靴を買うときもどんな靴を選べばいいんだろうと思って、街のなかの歩いていく足々を眺めれば、そこに動く靴はどれもなんらの変わりはないのだろうから寸分狂わずみんなは購入しなくちゃならない。そして購入した責任をしっかりとりはたさなくちゃならない。

わたしは学校につれて行くべきか悩んでみた。わたしは結局床に広がる液体を何度も何度もふき終わるまでに時間はすごくかかってしまって、朝ごはんは牛乳一杯もぜんぜん食べることができなかったし、お母さんはどたばたと化粧や着替えをしていて、このまま放っておくと不安で焦点のあわなくなってしまうかもしれない。まだなんだか喉にたまってる気がすると彼はこぼした。それにどうして学校へ行かないことがいいだろう？ わたしは急いで刈り取るように制服に着替えて家を出ようすると、窓をしめてテレビの電源を十回つけたり消したりし、蛇口を指の青白くなるくらいまでしっかりとしめたら三十分も遅かった。まだ朝になってすぐなのに汗は顔から腕からびっしりにあふれてしまっているから気持ちが悪い。大きく伸ばすように歩くと、ミナミヌマエビはアスファルトを這うようにして横を歩いた。公園の前を通れば、家の燃えてしまったようなおじさんが誰も乗っていない三輪車にビニール紐をくくりつけてとぼとぼと車輪を鳴らしているそばで、急かすように白い毛長の小犬は繰り返す鼻を左右へと振ってお腹を減らしている。通勤のピークも訪れはじめてころで、急ぎいらだつ会社員のひとが見ながら、焦って二人分の料金を支払った。なんとか駅の改札を抜けて学校につくと、もう授業のはじまる寸前の朝だった。授業中、ほとんどの時間を彼はトイレで吐くことに使っていたから気が気でない。先生はヨーロッパの宗教戦争について話をし、気づくと黒板はびっしり年代で埋まっているほど速かった。暑くてエアコンをつけていたからにおいがきつい。飛行機を水で薄めたようなにおいがする。

「ひとつの宗派を信じるものにとって他の宗派は除外の対象になるわけです。ただ、宗教そのものについて戦争を起こすのではなくて、政治的経済が裏にあります。宗教を利用し、神様を理由に人々に重税を課すなど、人々を抑圧していたんです。旧教派の抑圧により新教派が反乱を起こしたり、旧派が新派を虐殺するなどたくさんあります」

休み時間になるとハルはわたしの方へやって来て、わたしに授業中どうしたのときいた。ハルは気が向くとわたしにきくのは昔からのことで、昨日なに食べた？ とか、いつくらいに眠った？ とか、小学校の入学してすぐのころからハルは今も変わらずにそうだ。わたしは修学旅行の班決めであんまり仲のよくないひとといっしょにならなくちゃいけなくなって、言葉の極端に色落ち狭まってしまったときも、ハルは、ねえ、昨日のメールで送ったやつ見た？ とときいた。学校の帰り道で、わたしは四年生と六年生のときにハルと違うクラスだったから、わたしは毎日できればハルを玄関で待っていた。ハルのクラスはいつも終わるのが遅かったし、わたしはもし同じクラスなら班決めでもしあわせに、なんなく過ごせただろうにと、そのことばかりが連なってしまう。

見たよ。すごくない？ なんて。誰だと思う、とハルは拾ったコーラのペットボトルを膝に、交互なりズムでぶつけながら歩いていった。いちど半分くらいを殺してみたいひといるんだよね！ とメールで書いていた。足を進めるたびに砂のついたペットボトルの側面がベコベコと甲高く鳴いて、帰り道は意思ひとつで変わってしまう。ぶかぶかのズボンを履いた建築現場の男のひとは自動販売機を見ているのがわかった。あふれる建物が崩れてひとまわり新しくなっていく過程を知っている。

わかんない。ほんとに？ わかんない。カズナだよ、他よりずっとおもしろそうじゃない？ でもどうやってするの。絞殺とみせかけて中毒死！ とか、オスのひよこはベルトコンベアーで運ばれて冷凍保存されちゃうんだって、それを動物園のトラが食べるの。ふうん、と気まぐれに返してばかりいたわたしはそれがいつものことだったけれど、もちろん中学校にあがってもいっしょのクラスでよかったし、いつも玄関で待ってたし、高校を選ぶのだったハルと決めたから悩まず平穏に生きられる。ハルは砂の落ちたコーラのペットボトルを橋の上から投げると川の水面にぽちゃんと響いた。とてもすっきりしてハルは帰った。

風邪でもひいたの？ とハルは言った。先生のまねをしている男子が教室のうしろの誰もいないところを指さしていた。おい、そこのお前！ そこだよそこ！ なんだかのどにずっと詰まってるみたいなの、とわたしは言った。けれど教室のざわめきが多くて言えなかったかもしれないと思ってしまった。声が顔の端のほうの骨でぼんやりくぐもったままわたしの声は聞こえない。わたしはもう一度言いなおさなくちゃいけなかった。しゃべる声を耳で聞いてはじめて言ったことがわかるから。気をつけたほうがいいよね。うん、そう思う。悪いものでも食べたの？ 男子のひとは黒板消しを投げて、それはミナミヌマエビの背中に当たった。ぶるぶるとミナミヌマエビは身震いをしたから、白い煙が黒板消しからもわもわと噴き出して漂い、みんなはうわっとかきやつとか言って走った。ううん、寝不足なだけ。だめじゃん、わたしさ、このまえ冷蔵庫をあさってみただけだよ。教室のまんなかあたりを振り向き、うるさいねと短く笑った。賞味期限の切れたやつばかりで、びっくりしちゃって、どんどん捨てていったら冷蔵庫のなかが半分くらいになっちゃった。だいじょうぶ、朝からいろいろあって。いつもじゃん。

彼は廊下から見ていて、背中を洗ってこなくちゃいけないと思った。チャイムが鳴るといっせいにみんなは走り、自分の席についた。授業が始まるとすぐにハルは眠った。さっきの授業でもすぐに眠ってしまっていた。夕ごはんのカレーはいつもより少し甘くて、ルーを変えてみたのとお母さんは言っていた。ハルはとびきり辛いのが今でも好きだった。悲しい。彼はわたしのぶんも残さず食べた。安心したら次の苦悩に立ち向かえない。

役割分担が必要なんだ。

どうして？

水槽のなかはずっと狭いからね。

そんな風に言うから、すっかり話すのには慣れてしまったようだった。部屋でもコンビニでも変わらず気兼ねなく話していた。でもまだ喉の奥にたまった水はうまくきれいに吐き出せないままできらびらいて、あんまりそのままできらびらいて腐ってしまうかもしれないとわたしは怖がったりもする。彼はよく笑った。お母さんもつられて笑えばいいのに、もちろん笑うけれど、ミナミヌマエビはぜんぜん話を聞いてくれない。

お母さんはその日も遅いのだった。百貨店で服を売っていた。まわりは結婚していないひとか子どものいないひとばかりでたばこをよく吸うし、食堂では集まってだれかの悪口を言うからひとりで食べるし、買い物に来るひともお金を使う。お母さんはスーパーで食料品を買ってきて、わたしはそれを片づけ、冷蔵庫にしまいながら料理を温めて、お母さんがお酒を飲むと、在庫の処理のまちがいについてわたしは黙ってなおしてあげるのに、あのひとはわたしがどうしてもなくミスをしたように、まるで絶対に取り戻せないように言うから呼吸が少なくなってしまうと怒る。怒ってそれから言わなくなる。わたしは焦る。

「まったく新しいマンションを選ぶよりも、古くて、外見は悪くても内装のリフォームをしたばかりのアパートは値段も安くてずいぶん都合がいいらしいよ」とお母さんは言っていたから東京のアパートを選んだのだった。仕事場のおばさんが言っているのを聞いたと言われて、ふうん、とわたしはこたえた。壁を通してとなりから幽霊が出てくる。ガタガタと音のすることも頻繁にあった。駅までの道のりに公園と消防署はあって、前を通ると消防士のひとたちが朝の体操をしている。消防車のサイレンはすぐそばをけたたましく走っていき、それが前触れもなく遠い視界の端から湧きあがって聞こえていく。だから治安は十分に安心だと思うし、ほこりや砂のたまってちよっとすみの汚い階段をのぼった三階の角部屋に小さな机と小さなベッドを置いて、柵には大きすぎない程度のミナミヌマエビたちの水槽が前までの部屋からそのまま運ばれる。濾過装置のたてる低くて変わらない振動がわたし

はどこでも落ちついて眠れると思う。

今日ね、先生が妊娠したの、もうすぐ休むんだって。

そんな会話のなかでもテレビはみんなが喜んでいてうれしい。わたしはお母さんの顔しか見ていないのにテレビを向いていることはよくあった。もちろん一日をすばやく何往復もして、いくらかの価値を選びぬきたい。ただ、もろくて仕方がないわたしは部屋にもどると課題の本を読んで寝る。それから彼の背中を叩いてやる。叩きすぎて指にタコができてしまっている。手の甲の中指の根元のあたりの赤いあと。寝る前に柵の上の水槽について教えてくれた。そこではしっかりとした名前と役割が決められているのであって、それぞれ時間のめぐりを、担うべき仕事をはたして生きている。当然だけれど環境維持に務めるしかないエビたちは名前を知らない。わたしは彼はミナミヌマエビであるとはどんなことかを教えて欲しいと思うし、教えてあげなくちゃいけない。彼らは春から夏にかけての繁殖期に、メスは冬のあいだの卵巣をゆっくりと肥大させ、背中が深緑色に色づききれいになっていくと彼らは交尾する。オスとの交尾を終えたら一ミリメートルほどの卵を三〇から一三〇個ほど産むのだけれど、これはヤマトヌマエビなどと比べて大粒な少数で、産まれるそれまでをメスは腹脚にかかえて保護する。最初は深緑色をしているのがやがてゆっくりと褐色になっていき、幼生の姿は透けて見えるようになっていく。幼生を過ごす体長三ミリメートルほどの稚エビで産まれるその直後の稚エビは尾扇が未発達で、身体は半透明の白色をしている。稚エビは海へ降りることなく淡水のなかで成長し、寿命はだいたい一年くらいで一回や数回の産卵をした後に死んでしまう。わたしはネットで見たような指針が彼のあるべき姿だった形容をしていて、それは親切に書きなおしてあげるのだから彼は笑って答えるだろう。まったくその通りだよ、ぼくもそう思うな！

思えば空にきらきらと反射する熱帯魚たちの鱗のめくるめく群れは見え、なんの前触れもなく一方が一方を追いかけてまわすうちに子どもが生まれる。それも一瞬の散らばりでわからなくなって何匹かは大きくなっていく以外のほとんどがいなくなってしまう。エサにありつけないで死ぬし、熱帯魚はなにかの間違いで食べるし、ふっと流れにのって濾過装置の筒へと吸いこまれ水のない生きられない網目の先まで行ってしまう。誰のものだったっけ、という言葉は聞こえ、すぐに動作音に掻き消されて見当たらない彼は、一日に決まって一度か二度おとずれる食事の時間に思い切り高く飛びあがっていくと、ネオンテトラやグラミーやその他のミナミヌマエビたちの取りこぼしたカラフルなエサを抱えこんで着地し、ふにやふにやと水でやわらかくなったエサを水と一緒にまとめて口へ押しこんでいったら身体は半透明のミナミヌマエビの奥でカラフルな色の粒がまわっている、それだけが唯一きれいだと思っている。

いや実際のところぼくは別に動作音なんてどうでもよかった、それよりずっとエサの与えてもらうことの方がこわかった、知らず知らずのうちに食べ、知らず知らずのうちに吐き出すのが繰り返す震えよりおそろしいと言うともう、エサをあげるのが嫌になるんじゃないか、エサをあげないで放っておくほど嫌ではないけれど、落ちぶれるんじゃないか、なんて悩んでしまう。どうすればいい？

「動物たちには精神がなくて、自然が動物たちのうちで諸器官にしたがって動いているのだ！」

ミナミヌマエビは床で寝て、わたしは音楽を聞きながら気づいたらベッドのうえで目覚めている。

それからすぐに思い出してしまったのは次のような風景だった。死んだ犬や猫があらわれては消えるアパートの一室で、飼っていた犬や猫の死んでしまった人たちは、最初のころだけ訪れてたくさんの彼らの日常のあれこれの世話をし、自分の飼っていた犬や猫の姿をちらちらと家具や友人の身振りの錯覚に見るのだけれど、次第にあとから来るひとたちと交代する。それまでにやることといえばエサやりと掃除と自分の犬や猫の姿を決して逃さないことくらいで、しだいに管理者の女は逮捕される。彼はあれだけ長くいっしょにいたんだから、ね、と何度も母親に言われるわたしを見ながら自分の犬を呼ぶと近づかずにどこかへ行ってしまうから、昔の犬の姿を忘れたところまではっきり鮮明に思い描いているのだった。起きてみて、それは彼がひとだったからそうなのであって犬や猫にとっての夢だったとしたらどうなんだろうと考えた。おそろくきつと管理者の女は変わらず汚かった。老いてすでにもう交わることすらできない汚らわしさだった。

彼は食パンと目玉焼きとリンゴを食べて学校へ行くと。ハルは数日前から家出をしているままだった。先生は今日は風邪でお休みですと言ったけれど、ハルはそれでも家出だと言っている。いくぶん簡単な生存経路を辿っているのだった。身体にあった容器はいくらでも街に転がっていたから、すぐに困ることはないのだろうとわたしは思う。お母さんの帰ってくるまでに様子を何度か見に行かなくちゃならなかった。ハルは比べてみればなおざりにされることが多かったかもしれない。

いつもと違う駅の駐輪場で待ちあわせ、早めに行くと、どんどん暗くなってハルはやってきても顔は曖昧にわからなかった。じっとミナミヌマエビを見ているひとがいるから、もしかしたらハルの方もどこにいるのかわからなくなっているのかもしれない。心配になってあたりを見回してみると、音こそ電車の線路とこすれあう摩擦や、事務的な案内音声ばかりで埋れてしまっているのだけれど、彼はたくさんの会話に身を浸らせようとしていた。お腹が減っているのだ。すると今度こそ近づいてくるひとはいて、それはハルの声だった。わたしね、しばらくすると旅に出られるのかもしれない。どこにいくの？　ずっと寒いところとか、ずっと暑いところとか、そういうところまで行けるかもしれない、それくらいお金がある、なんでもできる、なんでも食べられる。そう言って純粹に驚いてはいるのだ。

メールで何人かの担当責任者と出会い、そのうちの一人の写真を見せてもらおうと髪の上に長いまじめな男のひとだった。必要な

こと以外はしゃべらない、ただ身体の切り売りのやり取りをする。そんな約束通りの工程が、ひたすら起伏のない音程で鳴り響き、そうしているうちにミナミヌマエビは前よりいっそう食欲を増していった。お母さんは残りものが減って喜ぶし、なんだか一緒に嬉しい。六日目の夜、学校の先生はコンビニでぼんやりお菓子の棚の前に立っているところをようやく見つけたことになっていた。来週からの教室はいつもと変わらない風景で、ハルはいなかった一週間のできごとについてきかなかった。うまく焦点のあわせようとしなければ指のさせないくらいになめらかな日々はやってきて、行事も過程もすっかり平らになってしまい、安心をしている。カズナは欠かさずメールをするのだったし、やっぱりそれもうれしそうな具合でするのだろう。

元気そう？ とわたしはきいてみた。そっちは同じクラスじゃん、なんでわざわざ。彼はわたしとハルとは違う高校を受験したし、ハルは本当は同じ高校へ行きたかった。ハルはなるべくその方がいいと思ったけれど、だめだった。たぶん元気じゃない？ ふうん、そう。そこで彼は返信をやめるのだった。よくそういうようなことがあったのだ。ハルのそうしたことは慣れっこだった。あえてリズムの延長を崩したい。

たとえばまだ生まれてなかったころの事件の裁判が昨日ようやく終わったことを文化祭の準備に使った古新聞のやぶれた片隅で初めて知っていた。犯人たちを捕まえる理由になった話をして罪の軽くなったひとりを除くとすべてが死刑なのだと聞いた。彼はハルと文化祭を抜け出して、前からハルの見たいと思っている映画をみた。いつも行く大きな映画館ではなくて、商店街の外れの古いビルの二階にある古い、個人営業の映画館でタオルケットのひとつひとつおかれた座席にすわるとむかしの公害の悲しさについて語るドキュメンタリー映画だった。なんの問題もなく生まれた子どもの成長が、有毒な魚を食べることで阻害される。思い描いた配置の笑顔は乱れて知らない間隔の痙攣は襲っている。ハルはすごく納得して、うんうんそうかなーと言いながら帰り、次の日の文化祭の片づけをしていたけれど彼はあまりおもしろくなくて疲れてしまった。むかしからそういう趣味があるし、今もそれに変わりりはなかった。

ただそれでも中学生のころ、死刑囚の途切れない息苦しさについて修学旅行のバスのなかでひとり解説書を読んだことがあった。それによると死刑囚は反省をするというよりも、いつくるかわからない死刑執行をなによりも恐れ敬っているようだった。それならべつにわざわざ牢屋へ入れておく意味もないじゃない、いっそのこと歩かせて朽ちた自分を見せておいたらいいじゃないとハルは思った。修学旅行では北海道へ行き、なだらかな草原に伸びる雑木林に隠れた線路を見ていたのはハルだけで、クラスのほとんどは飛行機のなかでのわいわい騒いだ興奮や昨日の雨のなかの札幌散策に疲れてトランプで遊ぶ元気もなしにバスの座席へ沈みぐっすり眠ってしまっていたし、わたしも眠りはしなかったけれどすごく眠そうにしていたのに、ハルだけは冴えた目で窓の外の建物のほとんどない視界の先のめずらしい線路を見てはひたすら読書をしていたから、あの本を手にとると修学旅行のいろいろなことを思い出すし、修学旅行のことを思い出すと死刑囚のあの鬱屈な時間を考える。ひさしぶりに本棚のすみから取りあげて、めくるとわたしはなんでこんな平凡をバスのなかでもそれからホテルでも読めていたんだろうとハルは不思議に思ってしまった。今ならもっとおもしろいことを知っているし、あのころは昔だったから知らないだけで、やたらと価値のない時間の過ごし方をしている。ずいぶんみんな大人になった。

あのころはよく灰色の錆びついたフェンス越しに線路を走るみどりと銀色の電車をながめながら、それはほとんどたったの一両か二両の電車でしかなくて、乗っている客も通学に使う高校生や中学生のたくさんいる朝や夕方以外はわずかに数人くらいのおじいさんやおばあさんが降りてくるくらいだったから、めったに、それこそ三十分おきくらいにしかやってこない電車で揺られて猫じゃらしやひまわりや知らない小さな雑草のゆらゆらと生えた空き地でぼつんとわたしはすわっていた。大学にあがる少し前くらいだと思う。窓枠やパイプにびっしりと蔦の絡まっている、誰かが住んでいるのかどうかさえわからない白塗りの長屋と線路に挟まれた、狭くて縦長な砂の空き地にのんびりとすわるわたしは学校を二時間目のはじまる前にこっそりと抜け出したから、あのころは窮屈な制服姿のままだった。

ちょっと今日は休むねと言うと、ハルはそっかーと言って許してくれた。エビくん元気？ ハルは彼のこともいいんじゃないと言っている。なんだかおもしろくなってしまっているのだった。なにもかもがそれなりに過ぎていく気がする。決まった順序で、決まった段差を歩んでいく気がする。

わたしは線路をこえて風はフェンスをガタガタと揺らし、ときおり踏切の鳴って電車は来るんだとわかると、彼は次の電車が何両編成なんだろうと思い、昨日見た夢のせいか、犬を飼っていた幼い生活について考えてしまうけれど、それは忘れてしまうほどにずっと昔のことなのだから誰もどうすることもできない。お母さんはひとりで家にいるのが悲しいとわたしは思っているだろうし、ペットを育てる経験が知らず知らずのうちに正しい大人へと教育してくれる、そう思って親戚のひとから雑種の子犬をもらってきてくれたのだった。

お母さんは名前をつけて、世話のやり方と散歩のルールを言った。子犬はクリーム色の右耳が少し茶色で、ちょこちょこと歩きまわるからかわいかった。学校に行ってみんなに子犬についてわたしは話した。学校と家のあいだをなるべく意味もなく走った。お母さんの帰りの遅くなる日がちょっとだけ増えたけれど、わたしは子犬の散らかしたトイレのシートをきれいに残さず掃除した。

わたしも犬かってるの、とハルは言ったから、見に行くと大人のミニチュアダックスフンドだった。わたしは会わせたいねと言うと、うちのバカ犬はすぐにワンワン吠えるからだぶんムリ、と言って喜んだ。たしかにハルの家へ入るとすごく吠えられてしま

っていたし、わたしの犬は吠えなかった。散歩の途中に大きな犬が繋がれているんだろなとわかるくらい凶暴な声と金網の揺らし方のする家があって、犬の姿そのものは垣根に隠れて見えないから、はじめてその前を通ったときはひどくびっくりしてしまっただけで、わたしは次のときから、むしろ犬が吠え返すのか、それともいつもどおり怯えてすたすた走するのか、確認することにした。一度も吠え返さなかったから、何度もその家の前を通って、ついにはその家のガレージにある車のナンバープレートまでしっかりと覚えてしまうくらいだった。

わたしは吠え返さなくても今でも大好きだ。時間になるとわたしはドッグフードの缶をあけて半分だけ器にもってあげれば、犬が缶をあけただけで走ってきて、そのときもやっぱり吠えたりすることはないけれど、呼吸を速めて、わたしがスプーンでドッグフードを器にもるところを見つめている。それからいいよと言うと犬は追い立てられるように食べるのがわたしは大好きだ。食べ終わるまでじっとそばについていた。犬はどんどん大きくなっていて、子犬とはとても呼べないくらいに大人になってしまったから、わたしはひとに言うときも子犬じゃなくて犬と呼び、子犬をかってるの、じゃなくて、犬をかってるの、と言わなければならなかった。犬の成長ははやい。でもしばらくしてわたしは散歩につれていくと、いつもの大きな犬がいると思う家の前で、あるときふいに顔をあげ家の方へむかって走りだし、綱をぐいぐいと引っ張ってちょうど横を走ってきた軽自動車にはねられて死んでしまった。車はおどろいてブレーキをかけたけれど、住宅街のまんなかで犬をひくなんて思ってもみなかったし、走り慣れた道に犬があらわれるところを今まで一度も気をつけて想像や確認したことはなかったし、スーパーの帰りで、帰ってくる娘のための夕ご飯を作ってあげなくちゃいけないし、犬を散歩させているわたしがまだ小さな子どもだったようだから、ごめんね、ごめんねと謝ってすぐに犬の死骸をよけて走り去っていった。だから犬はまだ頭を打ちつけてお腹をひかれたまま生きていたけれど息はなく、呼んでも目の前で手を振っても大きな犬だと思っ鳴き声が聞こえてきたとしても顔をあげない。しっぽも振らない。血もそんなに流れることはなくて死んだ犬はそのときにまだ少し生きていた。それから死んだ。悲しむわたしを知らない彼は近づきむしゃむしゃと食べはじめ終わるとあとには見たこともない骨だけがひっそり道路に残っていて、それも役所のひとは黒いゴミ袋に回収してどこかへ行ってしまった。

ミナミヌマエビは死んだ魚を残さない。彼は床に落ちているネオンテトラを見つけた秋と冬の変り目のときもそうだった。水槽は五十センチほど離れたところにある棚の上の、たぶんそこから飛び出したようで、まだ全身を大きくひくつかせている様子が近くで見るとわかった。一瞬ぎょっとしてから、すぐに飛びあがり、ティッシュペーパーを二、三枚とって床の上のそれをつまむと、不安な心地でおそろおそろ水槽へもどしてやった。水中を落下していくネオンテトラは呼吸こそあるものの平衡感覚が定まらず、ぐるぐると身体を回転させながら上下に忙しく泳ぎまわっていた。一時間ほどたつて水槽をのぞいてみると、一匹のネオンテトラが逆さまの格好で底にふわふわと沈み、エビたちはところ狭しと群がって肉片をついばむと綿のようになった肉片が骨に引っかかってやわらかく漂うだろう。食事も終わり、骨だけになった次の日にはどこにもいなくなってしまうネオンテトラがどれであるのか、どこにいるのか、なにをするのか、そのようにしてなんとか彼は知ることができたのだ。

生まれる背後からずっと伸びている線路の図式が彼らをどこまでも包んでいた。忘れるほどの交わりも搾取も逃走もみんな区別なく広がる地図には変わらない。食欲は日に日に増していくのだった。彼の食欲はそうやってすさまじいものであったし、どんどん膨れあがる性質の食欲なのだったから、それなりの補填は必要となってくることが、わたしの分までどんどん飲みこむようになった。もちろん彼にも不安のないわけではなくて、それこそスーパーで売られているソーセージの並びのほとんどは水と油と増粘剤でできているらしいし、鳥肉は卵を産んだあとの廃鶏が肉を増やすための薬に漬けられて潰される。豚は逆さぶりのままで失血におかされながら放置され、生けすの魚は無菌のエサを求め泳いで成長する。生きるとはそういうことだったし実際にそうやって生きてきた。でもそのままでは到底消化することはできないし、彼は自分でなにかもずっと先まで選びたい。ふつつつとした不満を抱きながらもお腹はいつまでも減ってしまう。ただ減るだけでなく食べても食べても終わらない繰り返しの延長線上に歩みをおく。往々にしてすべてが食べるというより口にふくむということだった。入りきらない内臓以上の消化物は喉を通すだけで吐き出せばそれで大方の作業はすむし、水を吸ってエラから流し出すように循環した機能を気づいたら身につける。夜の時間の過ぎた遅いうちに食べあさり、とっておいたビニール袋のなかへ吐いて口を縛り、タンスに吊るしておけば燃えるゴミの日になるとこっそりまとめて捨てていることを覚えた。お母さんは夏になれば湿気と密集と高温の強まるにおいに気づいてなんだか気持ちが悪いとよく怒って言った。わたしもしっかり怒ろうとしたけれど気持ちを考えてしまう。

ただそれでも救いになったのは大学へ入って一人暮らしをはじめれば食べ物に関するさまざまな自由をまとえるようになるだろうことで、それこそ食べたいものを食べたいときに食べれば文句は言われなし、食べたくないものがそこにあるなら笑って見て見ぬ振りをしていればわたしは許される。なによりお母さんをこれ以上疲れさせることがないのはとても大きい満足だと思うし、それだけでわたしはひとりでいられる。ひとりでいられるわけがなかったとしても彼は喜んでいて。ほとんど止めどなく食べることにしたからお金をたくさん使って飲食を欠ける方法のないように急かしては買いこんでいった。必死にわたしはバイトを探してはじめた動物園のバイトでは、動物園の動物たちのエサやりや飼育小屋の掃除をするのではなしに、ただただ動物園のなかのはしっこにあるファーストフード店で制服を着ながら接客をして、ハンバーガーを手渡して、レジを打って、ゴミを片づけているのを見ればゴミを投げられる。ひとつ歳上の先輩は遠くの彼氏との話をするかわりにごはんを食べさせてくれるから仕方なく彼は話を聞くけれどぜんぜん苦痛じゃない。帰りには檻のむこう側の動物たちをそれぞれ写真に撮ってためておくために一日一匹わたしは携帯電話をむける。サルもヘビもペンギンもそこにはきつとたくさんのひとが見られている。すぐに一周は終わってしまつてわた

しは二周目もやっぱりすぐにすり切れてしまうだろう。わたしは学校とバイトで毎日はいつも疲れはててしまうばかりだから蓄積も相応に増していく。それでも彼は一時のあいだ不都合もなしに生きている。外に出ていてよかったと強く奥歯を噛みしめる。友達もそれなりにいくらかできるし、ハルやカズナとはぜんぜん違う場所にいるけれどそれはどうしても仕方がないことだから。決まったことだから。それに窓ガラスは冷たいし、部屋の整理もついていて、お母さんの選んでくれたこの部屋でよかった。彼は身体に季節をはめこんでいけるようになっている。性質を持っている。

そして彼は水槽から逃げだした一年半後のあるとき、ふと見てみるとわたしはうまく動くことはできない。どうしたの、そんなふうにしてと言うとわたしは部屋にこもってもう十日にもなっている。すっかりお腹を減らしてしまって部屋にあるあらゆる食べ物を噛み砕いては次の手触りを探している。わたしはもうそろそろ食べなくちゃといけないと思ったけれど彼はひとのせいにしちゃダメだよとでも言うのだった。まさしくその通りのことなのでそのまま眠り、朝になると少しは和らいでいることが多いから目の前の解決方法は波たちこぼれるほどに満ちている。けれどそれは触れれば崩れてしまう危うさで、彼は部屋のなかのできうる限りを数えてみると腐ったわたししか数えるものはなにもなかった。それが唯一の、食べても怒られない道筋であるから彼はベッドにのぼって首筋の硬くなった皮膚のなかでもいくらかまだやわらかいと思う部分をよりわけ、かじってみると干した魚の苦味とおいしさが混じってあるように感じられた。わたしは気持ちよかった。それは恥ずかしいことだから、彼は時間をかけてひとりで知られないように食べつくし、まるで後ろから声をかけられたように顔をあげてきよろきよろと部屋のなかを見まわしたりしながら、髪の毛や指先、太ももや爪やあばらの裏側までしっかり肉片の小削ぎとるようにして食べつくし、流れた血液は皮膚の覆いを抜けてベッドのシーツへ、それからフローリングの床へと粘っこくたれていき、染みこむ以外はすべて乾ききる前に飲みくだし、わらわらとうごめく歯でしゃぶった骨をきれいに元通りの順番となるように並べ替え、だから静かに古びたわたしはそこにいた。ゆっくりと時間をかけて噛みしめ消化をし、同じようにあたり一面の吐き気にまみれながら、ふいに電話がかかってきて出ると、向こうから知らない子どもは話しはじめていた。絡みつくような間接的な手つきで彼は話した。

「十月九日に指を入れるだけのセックスをして彼のものも触ってないし全く思いあたるところがないのに妊娠したときのような症状がたくさん出ています。生理予定日は十六日だったのですが、この日には当然来なくて二十四日くらいから茶色のおりものが出ていて少し出血しましたがまた茶色のおりものがでるだけでぴたっと止まってしまいました。昨日二十五日は夜八時くらいから生理のような本格的な出血がはじまったのですがやはり三十分くらいで止まり今日はところどころトイレに行ったときにつくくらいでした。今はほとんどないかんじです。全く着床出血のような感じがなのが気になります。また二十四日に不安だったので検査薬でためしたのですが表面上は陰性なのですが何だか線が隠れているのではないかと疑ってしまってすごく疲れています。胸が少し痛いような気がするしまともな生理がくればいいのですが茶色のおりものがある程度だし入れてないので妊娠の可能性は無いと思いたいのですがすごく不安です。もし万が一、手に精子や我慢汁がついていた場合は妊娠の可能性は高いのでしょうか？ 検査薬も今までに数本試していますがはっきりとした陽性はでてきてませんがすごく心配です。病院に行く勇気がいまもなくてずっと調べています。どんなことでもいいので、同じような経験をされた方とかご意見を下さいませんか？ お願いします」

いつまで待っても返事は誰からもなくて、するとわたしは叫ぶだろう。

「生者の腹は土よりもずっといい墓場だ！」

途絶するような具合で電話は切れてしまい、あわてて身支度をするとうアパートの扉を開いて道路を走り、彼はすでに見つけた廃屋のアパートで出産の準備にとりかからなくちゃいけない、たくさん数え切れない子どもは産まれるのだから。

しまった。

[illegible]